

催眠期待と催眠状態イメージ・催眠感受性との関連

—日常生活に対する態度を媒介変数として—

清水貴裕 秋田大学教育文化学部

要約

本研究は、催眠期待と関連して催眠感受性に対して影響を与える要因として、自分の日常生活に対する捉え方（生きがい感）と催眠に対する捉え方（催眠状態イメージ）に焦点をあて、それぞれの要因と催眠期待や催眠感受性の関連性について検討を行った。研究では、47名の大学生（男性23名、女性24名）に対して催眠期待の強さを尋ね、生きがい感尺度と催眠状態イメージ質問紙を実施した後、Waterloo - Stanford Group Scale of Hypnotic Susceptibility, form C (Bowers, 1998)により催眠感受性を測定した。催眠感受性を従属変数として、催眠期待と生きがい感の各下位尺度による2要因分散分析を行った結果、催眠期待と意欲の間に交互作用が認められ、催眠期待のみが催眠感受性に影響を与えるわけではなく、人生や物事に対する積極性の高さと関連して、催眠に対する積極的な構えを生じさせていることが示された。また、催眠状態イメージを従属変数とした2要因分散分析の結果からは、催眠期待と催眠に対する動機づけを分けて検討することの必要性が論じられた。

キーワード：催眠期待、催眠状態イメージ、日常生活に対する態度

I 問題と目的

催眠感受性は、長期間にわたってほとんど変化せず(Piccione, Hilgard & Zimbardo, 1989)、個人内で比較的安定した特性として考えられている。そうした催眠感受性を説明する様々な変数が検討されてきた。古くから検討され、これまで多くの研究で催眠感受性を予測するひとつとして示されてきている変数に、「自分は催眠に反応できる」という催眠反応に対する期待がある。例えば、バーバー(1969)は、110名の参加者に「どの程度催眠されることを望むか(欲求)」と「どの程度深く催眠されると予測するか(期待)」を尋ね、それぞれ催眠感受性と有意な相関($r=.36$, $r=.33$)が得られたことを報告している。

またKirsch(1985)は、催眠反応の特徴のひとつである不随意的な反応のように、特定の刺激(暗示)に対して自動的に反応するという期待を反応期待と呼び、多くの研究で催眠感受性との関連を検討している。例えばSilva & Kirsch(1992)は、催眠反応を予測する変数として解釈的構え、反応期待、ファンタジー・プローンネス、解離傾向を比較し、反応期待とファンタジー・プローンネスが、催眠感受性の

いずれの測度とも安定的に正の相関を持つことを示した。またさらにパス解析により、ファンタジー・プローンネスも反応期待を媒介して催眠感受性に影響を与えていることを示し、催眠感受性に直接的に影響を与えているのは反応期待であると主張している。またKirsch, Silva, Comey & Reed(1995)は没入性、解離傾向、ファンタジー・プローンネスといった個人特性と態度、反応期待の催眠感受性との相関関係を3つの研究を通して検討し、どの研究においても催眠感受性と関連があったのは態度と反応期待のみ(それぞれ $r=.33$, $r=.30$)で、特に反応期待は、腕の浮揚、視覚的幻覚といった比較的反応が困難とされている暗示と関連がある(それぞれ $r=.33$, $r=.34$)と報告している。

Benham, Woody, Wilson & Nash(2006)は、スタンフォード催眠感受性テスト形式Cを用いて催眠暗示ごとに反応期待を尋ね、反応期待が催眠暗示に影響を与え、さらに催眠暗示に対する反応が、後に続く催眠暗示への反応期待に与える影響について検討している。その結果、反応期待は催眠を実施している間ほとんど変化しないこと、潜在的な特性を統制しても反応期待が催眠反応に有意に影響を与えている

ことが示され、反応期待と催眠反応のダイナミックな関係が明らかにされている。しかしBenham et al.(2006)では、反応期待は催眠反応に有意な影響を与える一方で、反応期待では説明されない催眠反応の分散が大きいことも指摘している。

反応期待の高さだけでは催眠感受性を十分に説明できないことについては従来より指摘されている。そうした要因のひとつとしてSpanos, Burnley & Cross(1993)は、催眠されることを同じように強く期待したとしても、暗示をどのように受け取り、解釈するかによって催眠に対する反応が異なることを指摘している。また、Wagstaff(1998)は参加者が「催眠」と認識している状況において、催眠に入っていると受け入れられることが重要であると指摘している。これらの指摘にあるように、「催眠」そのものや催眠暗示が、参加者によって様々な捉えられ方をするために、催眠反応として期待されている内容も参加者によって異なり、結果として催眠に対する期待が直接的に催眠反応に結びつかないと考えられるため、参加者が催眠をどのように捉えているかを検討することが必要であると考えられる。

そうした点を明らかにするために、清水・小玉(2001a)は、「催眠状態になると、人はどのようになると思うか」について尋ねる51項目からなる催眠状態イメージ質問紙を作成し、人々の催眠に対する捉え方について検討している。因子分析の結果、催眠状態イメージは2因子から構成されることを明らかにした。ひとつは催眠状態になると被催眠者の主体性が失われると考える「主体性喪失イメージ」因子で、もうひとつは催眠状態になると普段以上の何らかの能力を発揮できるようになると考える「潜在能力解放イメージ」因子である。これらの催眠に対する捉え方の違いが、性格傾向と催眠感受性の関連に影響を与えることも示されており(清水・小玉, 2001b; 清水, 2004)、同様に催眠に対する期待と催眠感受性の関連にも影響を与えることが予想される。

また一方で、Barber(2000)は催眠に対する期待の高い人々を「催眠に対する積極的構えの高い人々(positively-set "highs")」と呼び、その特徴について記述している。彼によると、積極的構えの高い参加者は、催眠や特定の催眠状態に対して態度を持ち、催眠を体験することに積極的に同期づけられており、催眠や暗示されたことを体験できるという期待を持っている。そうした積極的な構えには、催眠を

体験する以前から催眠が面白いものであるとか、自分の困難を解決したり病気を治したり、人生をよりよく変化させてくれるものであると考えていることが影響していると述べている。つまり、積極的構えの高い参加者の中には、自分自身の個人的な問題や現状に変化を与えてくれるものとして催眠を考え、催眠への積極性や期待に反映されている場合があるということを示唆している。こうした点から考えると、催眠に対する捉え方や期待だけではなく、その個人の人々の捉え方や期待の背景にある参加者自身の日常生活や現状についての認識についてもあわせて検討することが必要であろう。

そこで本研究では、催眠に対する期待の高さだけでは催眠感受性を説明できない要因として、参加者の催眠の捉え方である催眠状態イメージと、催眠に対する期待に反映されていると予想される参加者自身の日常生活に対する捉え方に焦点をあて、催眠期待とともに催眠感受性に与える影響について検討することを目的とした。

II 方法

調査対象者

催眠の実験に参加することを承諾した大学生47名(男性23名、女性24名)平均年齢19.2歳を調査対象者とした($SD=0.68$)。

質問紙の構成

催眠感受性尺度：参加者の催眠暗示への反応を測定する尺度として、Bowers(1998)のWaterloo-Stanford Group Scale of Hypnotic Susceptibility, form C(以下、WSGC)を日本語訳したものを使用した。WSGCは認知的暗示項目を多く採用しているStanford Hypnotic Susceptibility Scale Form C(Weitzenhoffer & Hilgard, 1962)を集団に利用できるように改良し、標準化した尺度である。本尺度は、リラクゼーション教示を主とした催眠誘導と12項目の暗示から構成されており、催眠誘導および催眠暗示は、実験者によって口頭で行われる。評定は参加者の自己報告により、各暗示に対して「反応した」か「反応していない」の2件法で行われ、合計得点は0点~12点の範囲をとる。WSGCの日本語版は標準化が進められており、妥当性、信頼性も確認されている(徳田・笠井・清水, 2003; Tokuda, Kasai & Shimizu, 2004)。

催眠期待：「自分が催眠にどれだけかかると思う

か」について、「全くかからない (0)」から「完全にかかる (100)」として数値で表すよう求めた。

催眠状態イメージ質問紙 (清水・小玉, 2001a)：催眠状態イメージ質問紙は、催眠に入るとどうなると思うかについて50項目の催眠状態について被験者に回答を求めるもので、主体性喪失イメージと潜在能力開放イメージの二つの下位尺度から構成されている。今回は、清水・小玉 (2001a) での因子分析により因子負荷量の高かった項目を各因子10項目ずつ選択した。この項目に対して、「自分自身がそうした状態になると思うか」どうかについて、「そうなると思う」から「そうなると思わない」までの4件法で回答を求めた。

生きがい感スケール (近藤・鎌田, 1998; 31項目, 3件法)：生きがい感スケールは、大学生が生きがいをどのように捉えているかについて探索的に検討するために作成された尺度である。本スケールは、現状満足感、人生享楽、存在価値、意欲の4因子から構成される。大学生が自分の人生や日常生活についてどのように捉えているかを把握する上で、本スケールが適切と判断した。各質問項目は、近藤・鎌田(1998)と同様に、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で解答を求めた。

手続き

実験参加を承諾した参加者に、生きがい感スケール、催眠状態イメージ質問紙、催眠期待からなる質問紙を実施した。その後、WSGCのスク립トに従った催眠誘導および暗示を口頭で提示し、催眠終了後、被験者はWSGC質問紙に回答した。

Ⅲ 結果

(1)各変数の平均と標準偏差および相関関係

催眠状態イメージ質問紙は「そうなると思う」を4点、「そうなると思わない」を1点として得点化し、主体性喪失イメージ、潜在能力解放イメージの各下位尺度ごとに合計得点を算出した。生きがい感スケールは、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として得点化し、下位尺度ごとに合計得点を算出した。下位尺度ごとに項目数が異なるために、下位尺度合計得点を項目数で除した平均得点を算出した。催眠期待、生きがい感の各下位尺度、催眠状態イメージの各下位尺度および催眠感受性得点の平均および標準偏差をTable1に示す。

Table 1 各変数の平均・標準偏差

| | <i>n</i> | 平均値 | 標準偏差 |
|------------|----------|-------|-------|
| 生きがい感 | | | |
| 現状満足感 | 47 | 2.31 | 0.56 |
| 人生享楽 | 47 | 2.18 | 0.36 |
| 存在価値 | 47 | 2.49 | 0.30 |
| 意欲 | 47 | 2.60 | 0.33 |
| 催眠状態イメージ | | | |
| 主体性喪失イメージ | 46 | 27.22 | 5.27 |
| 潜在能力解放イメージ | 47 | 25.11 | 4.29 |
| WSGC | 47 | 4.40 | 2.74 |
| 催眠期待 | 47 | 55.89 | 25.32 |

次に各変数の相関係数を求めた (Table 2)。催眠感受性は、催眠期待との間に有意な正の相関($r=.36, p<.05$)、生きがい感の下位尺度である人生享楽得点との間に有意な負の相関($r=.33, p<.05$)が認められた。

(2)催眠期待と生きがい感各下位尺度の関係

Table 2 各変数の相関係数($n=47$)

| | 催眠期待 | 現状満足感 | 人生享楽 | 存在価値 | 意欲 | 主体性喪失イメージ | 潜在能力解放イメージ | WSGC |
|------------|------|-------|-------|------|------|-----------|------------|------|
| 催眠予期 | 1 | | | | | | | |
| 現状満足感 | -.18 | 1 | | | | | | |
| 人生享楽 | -.03 | .38* | 1 | | | | | |
| 存在価値 | -.01 | .57* | .31* | 1 | | | | |
| 意欲 | -.21 | .58* | .19 | .61* | 1 | | | |
| 主体性喪失イメージ | .25 | -.09 | -.00 | .15 | .12 | 1 | | |
| 潜在能力解放イメージ | .23 | .28 | .22 | .20 | .24 | .14 | 1 | |
| WSGC | .36* | -.26 | -.33* | .03 | -.08 | .03 | -.01 | 1 |

* $p<.05$

Table3 催眠期待×生きがい感における催眠感受性の分散分析結果(平均、標準偏差)

| | | 生きがい感下位尺度 | | | | | | | | | |
|-------|----|---|------|------|------|--------|------|------|------|-------------|--|
| | | 現状満足感 | | 存在価値 | | 意欲 | | 人生享楽 | | | |
| 催眠期待 | | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | | |
| 低群 | M | 4.00 | 2.83 | 3.55 | 3.10 | 4.00 | 2.73 | 3.80 | 2.91 | | |
| | SD | 2.12 | 1.34 | 1.92 | 1.66 | 2.00 | 1.35 | 2.10 | 1.38 | | |
| | N | 9 | 12 | 11 | 10 | 10 | 10 | 10 | 11 | | |
| 高群 | M | 5.27 | 5.27 | 5.23 | 5.31 | 4.23 | 6.31 | 6.58 | 4.14 | | |
| | SD | 2.96 | 3.41 | 2.98 | 3.33 | 3.06 | 2.87 | 2.64 | 3.08 | | |
| | N | 15 | 11 | 13 | 13 | 13 | 13 | 12 | 14 | | |
| 催眠期待 | F | 5.59 * | | 低<高 | | 6.29 * | | 低<高 | | 4.55 ** 低<高 | |
| 生きがい感 | F | | | | | | | | | | |
| 交互作用 | F | 5.28 * 意欲 低<高 at催眠期待高 催眠期待 低<高 at意欲高 | | | | | | | | | |

* $p<.05$ ** $p<.01$ 空欄は*n.s.*

催眠期待得点および生きがい感の各下位尺度得点の中央値で高群と低群に分け、催眠感受性得点を従属変数とする2要因分散分析を行った (Table 3)。

その結果、催眠期待×現状満足感および存在価値の分散分析においては、ともに催眠期待の主効果が認められ(それぞれ $F(1,43)=5.59, p<.05, F(1,43)=6.29, p<.05$), 「自分は催眠にかかる」という催眠反応に対する高い期待を有する参加者の方が、期待の低い参加者よりも、実際の催眠に対する反応性が高いということが示された。

催眠期待×人生享楽の分散分析では、催眠期待、人生享楽それぞれの主効果が認められ(催眠期待 $F(1,43)=7.75, p<.01$, 人生享楽 $F(1,43)=5.33, p<.05$), 催眠期待の高群の方が低群よりも催眠感受性が高く、また、人生を楽しむ傾向を示す人生享楽が低い参加者の方が高い参加者よりも催眠感受性が高いことが示された。

催眠期待×意欲の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった($F(1,43)=5.28, p<.05$, Figure1)。催眠期待の単純主効果を検定したところ、意欲低群において差は見られず、意欲高群において有意な差が認められた($F(1,43)=12.38, p<.01$)。つまり、日常生活で様々なことにやる気を持って取り組む意欲の低い参加者においては、催眠感受性に差はないが、意欲の高い参加者においては、催眠期待の高い参加者の方が低い参加者よりも催眠感受性得点が高いということが示された。一方、意欲の単純主効果の検定では、催眠期待低群には有意な差は認められず、

高群において有意な差が認められた($F(1,43)=4.55, p<.05$)。すなわち、催眠期待の高い群においては、日常生活に意欲を持って取り組む参加者の方が意欲の低い参加者よりも催眠感受性得点が高いということが示された。

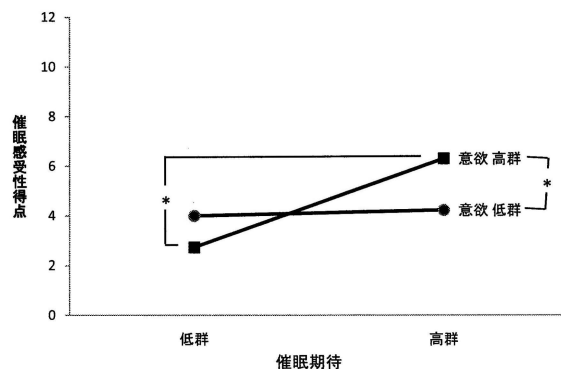


Figure 1 催眠感受性における催眠期待と意欲の交互作用

(3)催眠期待と生きがい感各下位尺度が催眠状態イメージに及ぼす影響

催眠状態イメージの各下位尺度(主体性喪失イメージ, 潜在能力解放イメージ)の尺度得点を従属変数として、催眠期待(高群・低群)×生きがい感の各下位尺度(高群・低群)による2要因分散分析を行った。

主体性喪失イメージの尺度得点を従属変数とした2要因分散分析の結果をTable4に示す。

催眠期待×現状満足感および存在価値を独立変数

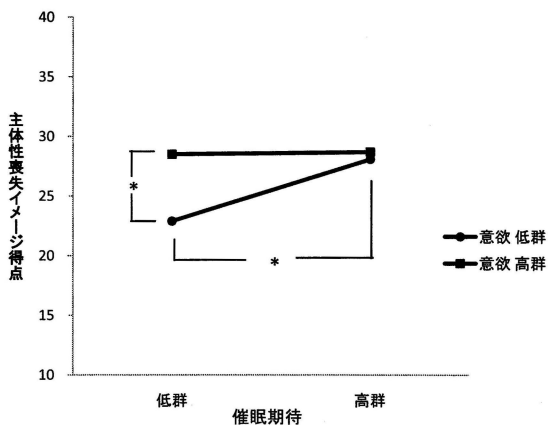


Figure 2 主体性喪失イメージにおける催眠期待と意欲の交互作用

とした2要因分散分析の結果、それぞれ催眠期待の有意傾向が示された(現状満足感 $F=3.67, p<.10$, 存在価値 $F=3.17, p<.10$)。いずれも催眠期待高群の方が低群よりも主体性喪失イメージが高いことを示している。

また、催眠期待×意欲の2要因分散分析の結果、交互作用に有意傾向が認められた($F(1, 42)=2.92, p<.10$)。単純主効果の検定の結果、催眠期待低群における、意欲の単純主効果($F(1, 42) = 6.53, p<.05$)と、意欲低群における催眠期待の単純主効果($F(1, 42) = 6.31, p<.05$)が有意であった。すなわち、自分が催眠に入る期待の低い参加者においては、日常生活における意欲の低い参加者よりも高い参加者の方が主体性喪失イメージが高く、一方、日常生活における意欲の低い群においては、催眠に入る期待の低い参加者よりも高い参加者の方が高い主体性喪失イメージを有するという傾向があることが示された(Figure 2)。

催眠期待×人生享楽の2要因分散分析においては有意な主効果および交互作用は示されなかった。

次に、潜在能力解放イメージの尺度得点を従属変数とした催眠期待と生きがい感各下位尺度の2要因分散分析の結果をTable 5に示す。

催眠期待×現状満足感による2要因分散分析の結果、現状満足感の主効果が認められ($F(1, 43)=6.56, p<.05$)、現状満足感の高群の方が低群よりも潜在能力解放イメージ得点が高いことが示された。また、催眠期待の有意傾向も認められ、催眠期待の高群の方が低群よりも潜在能力解放イメージ得点が高い傾

向にあることが示された($F(1, 43)=3.99, p<.10$)。

催眠期待×存在価値および意欲の2要因分散分析の結果、それぞれ存在価値と意欲の有意傾向が示された(存在価値 $F(1, 43)=3.12, p<.10$, 意欲 $F(1, 43)=3.63, p<.10$)。ともに高群の方が低群よりも潜在能力解放イメージ得点が高い傾向にあることが示された。

催眠期待×人生享楽による2要因分散分析においては、主効果および交互作用は認められなかった。

IV 考察

各変数の相関係数の結果から、催眠期待と催眠感受性(WSGC得点)はこれまでの研究と同様に有意な正の相関が得られ、自分が催眠暗示に反応できるという参加者の期待が、参加者の催眠反応を予測する変数のひとつであることが確認された。また、催眠期待と生きがい感の各下位尺度とはほぼ相関関係が認められず、参加者の日常生活に対する認識が、それ単独で直接的に催眠に対する期待に影響を与えているわけではないことが示された。しかし一方で、生きがい感の下位尺度である人生享楽得点と催眠感受性の間に有意な負の相関が認められ、日々の生活を楽しめていないという認識を持つ参加者ほど催眠感受性が高いという結果が得られた。このことは、自分は催眠に反応できるという期待とは別に、日常生活をより良いものにしたいという動機づけが催眠感受性に反映されていると推測され、催眠期待では説明しきれない分散を説明する要因のひとつであることが示唆される。催眠期待と催眠状態イメージの両下位尺度の関係に結果について、今回は参加者数が少ないこともあって有意ではなかったが弱い正の相関が示されており、催眠に対する期待を持つ参加者は、それぞれが催眠に対して自分なりの捉え方をしていることが示唆されたといえよう。

催眠感受性得点を従属変数とした催眠期待と生きがい感各下位尺度による2要因分散分析の結果からは、相関係数の結果と同様に全般的に催眠期待が催眠感受性に影響を与えていることが示された。生きがい感下位尺度のうち、意欲のみが催眠期待との間に交互作用が認められた。意欲尺度は、その内容が「私は将来に希望を持っています」「私は物事にやる気を持っています」など、人生に対して積極的に取り組もうとする姿勢が反映された尺度と考えられる。こうした人生や物事に対する積極的な姿勢の高

Table 4 催眠期待×生きがい感における主体性得点の分散分析結果(平均、標準偏差)

| 催眠期待 | 生きがい感下位尺度 | | | | | | | | |
|--|-----------|---|-------|------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 現状満足感 | | 存在価値 | | 意欲 | | 人生享楽 | | |
| | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | |
| 低群 | M | 23.33 | 27.64 | 23.70 | 27.70 | 22.90 | 28.50 | 25.50 | 25.90 |
| | SD | 5.29 | 5.92 | 4.85 | 6.45 | 5.00 | 5.62 | 7.08 | 4.89 |
| | N | 9 | 11 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| 高群 | M | 28.33 | 28.45 | 27.85 | 28.92 | 28.08 | 28.69 | 26.92 | 29.64 |
| | SD | 4.29 | 4.95 | 4.88 | 4.17 | 4.82 | 4.29 | 3.55 | 4.92 |
| | N | 15 | 11 | 13 | 13 | 13 | 13 | 12 | 14 |
| 催眠期待 | F | 3.67 + 低<高 | | 3.17 + 低<高 | | | | | |
| 生きがい感 | F | | | | | | | | |
| 交互作用 | F | 2.92 + 意欲 低<高 at催眠期待低 催眠期待 低<高 at意欲低 | | | | | | | |
| + $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ 空欄は <i>n.s.</i> | | | | | | | | | |

Table 5 催眠期待×生きがい感における潜在性解放得点の分散分析結果(平均、標準偏差)

| 催眠期待 | 生きがい感下位尺度 | | | | | | | | |
|--|-----------|------------|-------|------------|-------|------------|-------|-------|-------|
| | 現状満足感 | | 存在価値 | | 意欲 | | 人生享楽 | | |
| | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | 低群 | 高群 | |
| 低群 | M | 22.78 | 25.00 | 23.27 | 24.90 | 23.20 | 24.82 | 24.10 | 24.00 |
| | SD | 4.18 | 4.49 | 4.31 | 4.56 | 3.71 | 5.00 | 4.86 | 4.17 |
| | N | 9 | 12 | 11 | 10 | 10 | 11 | 10 | 11 |
| 高群 | M | 24.33 | 28.18 | 24.62 | 27.31 | 24.46 | 27.46 | 24.58 | 27.14 |
| | SD | 3.50 | 2.92 | 4.01 | 3.86 | 3.91 | 3.84 | 4.10 | 3.84 |
| | N | 15 | 11 | 13 | 13 | 13 | 13 | 12 | 14 |
| 催眠期待 | F | 3.99 + 低<高 | | | | | | | |
| 生きがい感 | F | 6.56 * 低<高 | | 3.12 + 低<高 | | 3.63 + 低<高 | | | |
| 交互作用 | F | | | | | | | | |
| + $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ 空欄は <i>n.s.</i> | | | | | | | | | |

さは、単独では催眠反応に結びつかないが、自分自身が催眠に反応できるという期待を持っている場合には、Barber(2000)が指摘するように、催眠者に暗示されることにできる限り協力し、積極的に催眠を体験しようと取り組む積極的構えを生み出す要因となるのであろう。また、意欲低群においては催眠期待の高さに関わらず、催眠感受性得点に有意な差が認められなかった。催眠に対する期待が高い参加者であっても、人生や物事に対する積極性が低い場合には、Spanos et al.(1993)が指摘するように、催眠中の暗示に対しても受動的な姿勢でかわることになり、期待の低い参加者よりも催眠感受性が高いという結果にはならないと考えることができる。

そうした意欲の影響は、催眠状態イメージを従属変数とした分散分析の結果にも表れている。意欲と催眠期待の2要因分散分析の結果によると、主体性

喪失イメージを従属変数とした場合と潜在能力解放イメージを従属変数とした場合のいずれの催眠状態イメージにおいても意欲高群は得点が高いことが示されている。自分自身が催眠に反応できると期待するしないにかかわらず、人生や物事に対して積極的に取り組もうとする姿勢の高い参加者は、参加した催眠実験にも積極的に関心を示した結果が催眠についての自分なりの捉え方を表すという結果につながっているのではないだろうか。そのような観点からも、積極的な関心やかかわりから示される催眠に対する動機づけの高さと催眠に対する期待は同じものではないという考えが支持される。

しかし主体性喪失イメージを従属変数とした場合の意欲と催眠期待の2要因分散分析においては交互作用が認められ、意欲高群においては主体性喪失イメージ得点に催眠期待は影響しないが、意欲

低群においては催眠に対する期待の高い参加者の方が低い参加者よりも主体性喪失イメージ得点が高いという結果が示されている。これは潜在能力解放イメージには見られなかった結果であるが、こうした結果が「催眠状態になると催眠者にコントロールされる」という主体性喪失イメージにのみ示されるのは、日常における意欲の低くかつ催眠期待の高い参加者が催眠に対して求めている効果、すなわち Barber(2000)が指摘するような自分の生活をより良くしたい、現状に変化をもたらしたいというような期待を反映しているのかもしれない。今回の主体性喪失イメージを従属変数2要因分散分析の結果では、そうした交互作用は意欲においてのみしか認められなかったが、Table4に示されるように、現状満足感や存在価値の低群における平均値にも意欲低群と同様の傾向は認められる。今後の研究では参加者数を増やすことでこの点についてより明確な結果を得るとともに、催眠に対して参加者が求めることをより詳細に検討することが必要であると考えられる。

また、今回の研究からは明らかにならなかったが、「自分は催眠に反応することができる」という自己予想は何をもとにして行われるのかという点を明らかにしていくことは、催眠感受性の個人差を説明する上で重要であろう。

付記

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費若手研究B(課題番号21730541)による助成を受けている。

V 引用文献

- バーバー・T.X. 成瀬 悟策(監修) 1969 催眠. 東京: 誠心書房. (Barber, T. X. Hypnosis. New York: Van Nostrand Reinhold Company.)
- Barber, T. X. 2000 A deeper understanding of hypnosis: Its secrets, its nature, its essence. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **42**, 208-272.
- Benham, G., Woody, E.Z., Wilson, K.S., Nash, M.R. 2006 Expect the unexpected: ability, attitude, and responsiveness to hypnosis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 342-350.
- Bowers, K. S. 1998 Waterloo-Stanford Group Scale of hypnotic susceptibility, form C.: Manual and response booklet *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **46**, 250-268.
- Kirsch, I. 1985 Response expectancy as a determinant of experience and behavior. *American Psychologist*, **40**, 1189-1202.
- Kirsch, I., Silva, C. E., Comey, G. & Reed, S. 1995 A spectral analysis of cognitive and personality variables in hypnosis: Empirical disconfirmation of the two-factor model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 167-175.
- 近藤勉・鎌田次郎 1998 現代大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究, 11(1), 73-82.
- Piccione, C. Hilgard, E. R. & Zimbardo, P. G. 1989 On the degree of stability of measured hypnotizability over a 25-year period *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 289-295.
- Silva, C. E. & Kirsch, I. 1992 Interpretive sets, expectancy, fantasy proneness, and dissociation as predictors of hypnotic response. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 847-856.
- 清水貴裕・小玉正博 2001a 催眠状態イメージと催眠態度との関連 筑波大学心理学研究, **23**, 219-227.
- 清水貴裕・小玉正博 2001b 催眠状態イメージが催眠反応に及ぼす影響 心理的リアクタンスとの関連から 日本心理学会第65回大会発表論文集, 971.
- 清水貴裕 2004 催眠状態イメージと性格特性の関連(1) -没入性との関連- 日本催眠医学心理学会第50回大会発表抄録集, 48.
- Spanos, N. P., Burnley, C. E., Cross, P. A. 1993 Response expectancies and interpretations as determinants of hypnotic responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1237-1242.
- 徳田英次・笠井仁・清水貴裕 2003 日本語版ウォーター・スタンフォード集団催眠感受性尺度, 形式Cの標準データ 日本催眠医学心理学会第49回大会発表抄録集, 26.
- Tokuda, H., Hitoshi, K. & Shimizu, T. 2004 Japanese norms for the Waterloo - Stanford Group Scale of Hypnotic Susceptibility, 16th International Congress on Hypnosis and Hypnotherapy.
- Wagstaff G. F 1998 The semantics and physiology of hypnosis as an altered state: towards a definition of hypnosis. *Contemporary Hypnosis*, **15**,

149-165.

Weitzenhoffer, A. M., & Hilgard, E. R. 1962

Stanford hypnotic susceptibility scale: Form C.
Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.